北九州市の文化財を守る会

会　報

№56.　61. 9. 25

発行　北九州市の文化財を守る会
北九州市小倉北区鍛冶町一丁目7-2
森鷗外旧居内
電話（093）531―1604
印刷　博文堂印刷所
北九州市小倉北区長浜町2-22
電話（093）511―1011

劉寒吉先生追悼

劉寒吉顧問を偲ぶ

小林安司

本会の生みの親とも申すべき劉寒吉氏が去る四月二十日に物故されてから、既に初盆もすぎ、いま秋の彼岸を迎えんとして、寂寥の念さらに新たなものがある。

回顧すれば昭和四十六年本会が結成の際、設立準備委員長として尽力せられ、その時「会報」一号の「文化財を守る会の発足に寄せて」の一文のなかで

「市に文化財を保護する条例もあり、近く郷土資料館もうまれる。こういう時期に守る会が生まれた。これからは人眼にふれずにひっそり眠っている古文化財を発見したり、消亡や破損から守るための措置を講じたり、なによりもまず、郷土の歴史の証明となる美しい文化財とは何かを勉強したりなど、仕事はたくさんある筈」

と、本会の向うところを示唆された。

その後、四十七年からの市の民俗調査会の調査活動には、氏は委員長として自ら先頭にたって指導されたが、それと呼応、翌年の「会報」一〇号に「無名の文化財」の題で

「文化財という認識は、有名なものだけに眼がそそがれがちだが、小さなもの、無名のもの、いわば生活文化財も重視すべきで……来年には市立博物館が生れるが、けっしてこんな物がと棄てたりしないで、博物館に寄付してほしい」

と呼びかけ、さらに「手近かにある無名の文化財に眼をくばるのも、文化財を守る会の仕事に加えていただきたいもの」と会員各位へ要望された。

ついで五十三年の「会報」二三号の「石碑は語りかける」では、曽根の新田碑、手向山の武蔵碑を例証にして

「石碑は路傍から、藪かげから、雑草の中から声のない声で語りかける。私たちはその話に、しずかに耳を傾け、さらに後代へと伝えてゆきたいものである」

と述べておられるが、私にはかつての探訪行での氏の姿が彷彿と眼にうかんでくる。

五十六年の三六号には「現代を記録する」の一文で

「三十年前の戦争の記憶すら風化しつつある現代です。十年は一昔というよりも、もっと早い速度で変遷しつつあるのです……それだから、現在、私たちの身辺、眼前のあるものを、或は文章で、或は写真で、絵で記録、保存することは目下の急務である」

との、この考現学的な提唱はまさしく適切な指摘であった。

五十七年春の鷗外旧居公開にあたり、三八号の特輯号で、氏は「鷗外と小倉」と題して、市民と親しく接触した鷗外への市民の尊敬、「我をして九州の富人たらしめば」などで市民の意識の向上を希求した鷗外の姿などを強調されたのも、各位の記憶に新たなものであろう。

先達劉寒吉顧問の折にふれ、時に応じての滋味あるこれら語録をひもどき、今ここに謹んでご瞑福をお祈り申し上げる次第である。

バスによる 文化財めぐり

今回は会員多数の要望もある**杵築の城下町探訪**バスを企画しました。別府湾の潮風につゝまれて、静かに時を重ねた城下町〝杵築〟は主要路を避けた地が幸して、幕末の名残りをその儘とゞめ、武家屋敷の土塀の角からひょいとチョンマゲの武士に出会うような気のする町です。

萩、長府、秋月を重ね合せた様な趣を持つ、町がまるごと文化財と云っても良い様な城下町です。

講師は杵築市文化財調査委員長後藤安臣先生に興味ある解説とご案内をお願いしております。

時恰も体育の日、軽装でお気軽にご参加下さい。

日　時　十月十日（祝）雨天決行
会　費　四千五百円（弁当持参のこと）
募集人員　四十五名（先着順・満席次第〆切）
締切日　十月五日（日）
申込方法　会費を添えて事務局まで。電話での予約も可。
申込先　小倉北区鍛冶町一丁目七―二　森鷗外旧居内・事務局　電話　五三一―一六〇四
出発時間　若松区役所前　午前七時四十五分　小倉駅北口　午前八時
帰　着　小倉駅北口午後六時半頃の予定
杵築特産品　手造り味噌、みかん、茶、椎茸、海苔等

見学先

杵築城

大友二代親秀の六男親重は建長二年幕府から豊前国木付荘に封ぜられ、木付を氏とし城を築き木付城の起源となった。木付氏四代頼直は応永元年に現在地に移城、十七代統直の時滅亡した。以後前田、杉原、細川、小笠原、松平と藩主が交代し、三代藩主松平重休の時、将写下賜の朱印文に木付の文字が杵築と書かれたので以後杵築と改められた。松平十代親貴を以て廃藩となった。城は昭和四十五年に再建された。

古代文化公園

市内の山野に埋れていた石造物の宝きょう印塔、国東塔、庚申塔などを杵築城内に集めている。

民俗資料館

古い時代の農具、漁具などを展示している。中でも名産の「七島蘭」の製品加工用具は珍らしい。

勘定場の坂

北台武家屋敷の東側の坂。下に藩の勘定場があったところから付けられた名前。坂は馬や駕籠で登りおりできるように幅の広い石段となっている。この坂の両側にも当時の武家屋敷の土塀が残っている。

北台武家屋敷跡

勘定場坂を上りつめた家老丁の通りは古めかしい土塀が続く、城下町杵築の見どころ。東寿亭、藩校の門、松崎、磯矢、能見、興津、大原の重臣屋敷は、江戸の名残りを今にとどめて見ごたえがある。武家屋敷の長屋門にかごの吊された邸もある。

学習館跡

当時の藩校。北台武家屋敷のほぼ中央にある。現在は杵築小学校となっているが、正門は藩校の門がそのまま使われている。

南台臺丁武家屋敷跡

武家屋敷の姿が整い残っている通りで、石段を上ってくぐる長屋門は見上げる姿に見ごたえがある。石垣の上の高い土塀は白壁が所々に残り、古めかしさを感ずる通りでもある。旧医宅の入り口の馬つなぎの石も城下町でなければ見られない。

寺　町

城下町づくりに寺院を西端に集め通りに沿って一線をなして並んでいる。これは防衛線の役目を果たしている。

正覚寺

江戸の大火で有名な八百屋お七の恋人吉三郎にゆかりの寺で自分の罪の深さと、お七の霊を弔わんと諸国行脚の旅に出、縁あってこの寺にとどまる。名を是三と変え、一生をこの寺で終えた。彼が諸国行脚のおり持仏としたという小さな仏像を残した。また、是三と銘のある鉄鋳釈迦如来像もある。

長昌寺の庭

藩主夫人の菩提寺であるが、庭園が素晴しい。三百余坪に平庭、築山両様式を用いて作庭をしている。石組み、地割が彦根の楽々園に似ているといわれている。

宇佐神宮宝物館（新装）

最近、宇佐神宮の宝物館が新装されましたので、帰途、宇佐に立寄り拝観します。

◇文化財保護審議会委員改選◇

北九州市文化財保護審議会では前委員の任期満了に伴い、昭和六十一年八月より、次の方々が委員に就任しました。任期は六十三年七月まで二年間。

担当分野	氏名	備考
歴史	飯田久雄	再任
〃	能見安男	〃
〃	○門司宣里	〃
〃	◎米津三郎	〃
民俗	岡野信子	〃
〃	吉田美知子	〃
美術工芸	錦織亮介	〃
〃	福田安敏	〃
考古	黒野肇	〃
〃	山中英彦	〃
建築	中村雄三	〃
生物	山岡誠	〃
地質	北条凱生	〃

（注・◎会長　○副会長）

編集後記

▼会報第五十六号は小倉北支部の担当でしたが、種々の事情で遅くなりました。お許しのほど。次号は門司支部の担当ですので、よろしくお願いいたします。

▼本号は劉寒吉先生の追悼を主題にしました。まだ想い出多き方々がおられると思いますが……。

▼いよいよ行楽の秋となりました。バスハイクは若松支部が企画しました。ふるってご参加ください。

〈保〉

劉先生の御恩顧を偲んで

玉江彦太郎

劉先生はおおらかで、優しく、ふところの深い方であった。特に後進への思いやり、そのきめこまやかな心配りには、ただただ敬服するほかなかった。

先生にはじめておめにかかったのは、たしか昭和二十九年、阪大・宮本又次教授をむかえて開かれた小倉郷土会の会合であった。

以来、三十年をこえ、ほんとうに長い間、一方的に先生のご庇護を頂くばかりであった。

昭和三十年九月、千仏鍾乳洞の台上に建立された岳父、大石高平の開発顕彰碑文も、先生のご好意に甘えて無理にお願いした。

除幕式当日は残暑のきびしい山路を徒歩で現地へお越し頂いた。

その年の暮、友石孝之博士の高著「村上仏山」に併せて、小著「宇都宮落城記」の出版を祝う会を催して頂いた。城野の専妙寺の庫裡（村上秀代さん宅）奥座敷であった。

昭和三十二年四月、私は日銀の辞令をうけて、大阪支店に転勤することになった。

先生からは早速、部厚な「大阪方言大辞典」を餞別に頂いた。

夜行列車で赴任したが、小倉駅に停車したとき、上屋の途切れたホームに先生のお顔が見えた。夜分遅くお見送りを頂いたわけで、思はず胸にジンと熱いものがこみあげてきた。

やがて十七年の歳月が流れ、私は新しい仕事につくため郷里に帰って来た。早々に先生からお便りがよせられた。それには

ごぶさたしています。

いよいよ北九州に帰られることになったそうで、郷土会も百万の味方を得た思いです。

やはり、旧知はみんな顔が合わぬといけません。

これで安心しました。

感激、これにすぎるものはなかった。

私の帰郷記念句集「望郷」には先生の心暖まる序文を頂戴した。

いま、先生におめにかかれる術はない。せめて、先生から頂いた色紙の中から、先生の佳句を写してご遺徳を偲びたい。

夜の座を早春の友と更かしけり

時雨して忘れ風鈴鳴りやまず

風の日や女山は見えず瀬音のみ

合　掌

劉先生の思い出

吉田　一芳

八幡郷土史会が発足したのは、昭和四十六年十一月九日のことですが、この切っ掛けとなりましたのは劉先生の強い示唆があったからであります。

当時八幡には郷土史の研究家は相当数おりましたが、仲々まとまりにくいムードでありました。

行政当局への要望等一つの会としての動きがなくては不自由なところから先生の発言となったのですが、同じ思いをされていたのが美和弥之助先生で熱心に会の発足を求められていました。そのまとめ役を私にと両先生のお勧めでしたが、その方面に疎く又素養もありませんので固辞していたのですが再三のお勧めで郷土史会の発足に踏み切りました。

発会式には、九大の岡崎敬先生に講演をして頂き約六十名が集まりました。爾来十五年会長として今日に至っております。

又先生は柳川とは切っても切れないつながりをお持ちでしたが、嘗て「松月」主人の中島氏息女と八幡の平方と言う九大大学院卒の好青年との縁談がまとまり、その仲人を私にするようこれ又先生特有の強引さで説得されたこともありました。この六月柳川に参り松月を訪問、ご主人夫婦と劉先生の思い出話に追慕の情を深めた次第です。

劉　先生の想い出

大神　文和

私と劉先生との出会いは、昭和三十四年二月、火野葦平宅での恒例の新年宴会の席でした。火野さんと私とは支那事変（昭和十二年九月十日召集）以来、同じ中隊の戦友でしたので、火野宅での文士連中の新年宴会に招かれ、同じふく料理のテーブルに、火野さん、劉さん、原田種夫さん、岩下俊作さん、星野順一さん、戦友の坂上利雄さんと私がつきました。劉さんは門司八幡宮の事をよく知っておられ、星野さんは門司の事に詳しく、すぐ心安く親密になりました。

劉さんは古くからの小倉ロータリークラブの会員で私は門司の会員でしたので、時折り小倉ロータリークラブにメイキャップに行きますと私を見つけ同席しました。又戸畑ロータリークラブで遇然一緒になり、其の時の卓話で健康のための金冷法の話があり、国電中の話で金冷法を劉さん実行しますかと尋ねましたところ、あんな事をしたら金玉が凍ってしまうからやらないと言われ、又近来耳が遠くなったので、医者に見てもらったら耳あかがたまってをり、除けたら聞こえだしたと言っておられました。

劉さんは毎年旧正月の和布刈神事に行かれた時は、帰りに甲宗八幡宮に参拝され私を訪ねて下さいました。私が文化財を守る会に入会させていたゞいたのも劉さんの推せんではないかと思います。

昭和四十三年五月、甲宗八幡宮境内に小倉歩兵一一四聯隊第七中隊の慰霊碑を建立、火野さんが私宅に来られた時に戦地で撮りましたアルバムの内表紙に書いて下さった詩を刻みました。其の詩は

杭州西湖の思ひ出に

西湖の水の青くして

紅木蓮の花咲けば

たづぬる春の身に近く

兵隊なればたのしかる

花と兵隊　葦平

為大神曹長

除幕式の時、門司村岡写真館に式の写真を頼んでおりましたが、其の時劉さんの写真を撮り見事な出来栄えでしたので大きく引伸しあなたの葬式写真にと劉さんに贈りました。除幕式は盛大に行われ劉さんは祝詞で葦平さんの事を感慨深く話されました。

又昭和四十二年十月二十三日、当

社に明治維新百年記念碑を建立致しました時に、劉さんがお祝の詩を書いて下さいましたので副碑に刻みました。其の詩は

国興す明治のこころ伝えんと

甲宗の宮にいしぶみの建つ

劉　寒吉

劉さんとは永年のおつきあいで数々の想い出がありますが、今迄の御愛顧を深謝致し御幸福をお祈り致します。

太鼓と劉さん

大隈　岩雄

○太鼓の秘技

劉寒吉さんとの交際は久しい、戦前、翼賛会・壮年団の世話などで苦楽を共にした。

或る年の祇園祭に劉さんは向う鉢巻で太鼓を打っていた。ドロは弟さんの中島さん、ジャンガラは吉井さん。

私はびっくりしたぁ　音が腹にびしびし響く、上手やなあ？しばし聞きほれて、よし俺も一丁やるかと、中島さんから撥を借りてドロを打った、三分も叩くといつの間にか劉さんのカンに引込まれてしまうとる、うーん劉さんの撥さばきはうまいのうと感じた。

○太鼓の競べ打ち

終戦の翌年「汐湯」の調査で旭町の速水精一さん方を尋ねた、開口一番「大隈さんよい祇園太鼓打ち競べをやろうや？」、会議所会頭の宮内竹次郎さん・鉄井さん・一色さんと走り廻った。戦災を受けなかった山車が数台、小倉市庁舎前の広場に集った。昭和二十二年の夏である。審査員に劉さん、岩下、阿南、宮内さんが当った。大成功、太鼓好きの人々から喜ばれた。

○太鼓の祇園

市の観光課から頼まれてパンフを書いた、題字に「祇園太鼓」と林市長さんが書いてくれた。

「なしかぁ　小倉の祇園は太鼓の祇園と云うんぞ、文化財指定はよそにない両面打ちの独特の音じゃろうがぁ？」

ドンと叩かれた、ううん頭の芯まで痛かった。

ぎおん太鼓競演会審査席

劉先生を偲んで

村上　秀代

劉先生にはじめてお目にかゝったのは、昭和十年白秋先生が歌誌多磨を結成された後北九州に立寄られたときであった。

その時北九州には同人の方もなく自称歌人ばかりであった。扨お昼をどこでさしあげようかと随分心配したが、結極和布刈の沈潮閣がよかろうと云うことになった。

沈潮閣は二間ぶっとほしでお座敷がしつらへてあった。

波のひたひた打寄せる音をきゝながら、白秋先生と奥様は刺身のあらいを美味しい美味しいと云って召上って下さった。その時二、三人知らない男の方が一緒に同行されたので、あの方誰？と皆でさゝやきあったが、今考へるとその方々が劉先生や原田種夫先生であった。

その時は白秋先生の傍に座っていらっしゃるので無論お話も何もしなかった。其後、昭和廿七年小倉郷土会がつくられてからは毎月一度は、曽田共助先生のお宅の例会に出席し自然と知るようになった。しかしいつも皆と一緒の集りで、個人的にお話したことはなかった。ずっと以前正月二日に魚町のお店にお伺いしたことがあったが、硯開きが行われているとかで、私はそのまゝ帰宅したら、暫らくして歌人の浦橋七郎氏が迎えに来られて、再度お伺いしたことがある。硯開きには九州文学の方々が多く其後は二、三回しかお伺いしなかった。

しかし同じ白秋先生につながる者として心にかけてゐて下さったように思う。歌集を出しなさい私が序文をかいてやるからと言って下さったが今に歌集も出さず、遂に序文も頂けなくなって仕舞った。

亡くなられた今、私には大きな心の支えであったと思わずにはゐられない。

いつでも聞ける、教えてもらえると云う気持でいたのに…。

心にうつろさを覚える昨今である。

劉さんと森鷗外旧居

米津　三郎

北九州市における森鷗外の事蹟を明らかにし、北九州文化史のなかで鷗外を位置ずけ、その大きな貢献を顕彰することにより、現在の北九州の文化を前進させ発展させる要素とすることは重要な課題である。この点について劉寒吉先生の果たされた努力は、実に大きなものがあった。その一々についてはここでは記さないが、小倉時代の鷗外と劉さんのかかわりについて、劉さん最後の仕事となった森鷗外旧居東隣りの土地を確保するときの経緯について記録にとどめておきたいと思う。

小倉城下町は慶応二年の長州との戦いと、明治三十年代以降の発展で大きく様相が変ったが、鷗外旧居のある鍛冶町から堺町・円応寺筋・紺屋町・古船場町辺りは昭和二十年代までほまだ古い小倉の面影が残っていた。特に鍛冶町付近は徒士原といって、静かなたたずまいの住宅が並び、城下町の住宅地としては一等地に属するところであった。ところが昭和三十年

代に入ると、いわゆるバー街へと変貌し、一転して夜の歓楽街と化した。

それでも鷗外旧居の一角だけはそこに居住した宇佐美マサさんのご意志もあって、どうやら旧態を維持することができ、市が買い上げて鷗外旧居を復元することができた。これについての劉さんの力が大きかったことは言うまでもない。宇佐美マサさんの孫にあたる佐藤さんの所有する旧居東隣りの土地（三二一平方メートル余）が幸いにも空地になっていたが、ここも中高層ビルが建ち夜の歓楽街の仲間入りをしてしまうことがいちばんの懸念であった。そうなると旧居が飲み屋ビルの谷間になり、せっかく復元され市の指定文化財になった森鷗外旧居が死んでしまうことになる。なんとかしなければ、という気持ちはみんな持っていた。

昭和五十八年の暮れのことである。当時の森鷗外旧居館長石崎徳太郎さんから東隣りの土地が売りに出ているとの通報を受けた。最も怖れていたことが現実の問題となったのである。さっそく劉さんと相談し、石崎館長には直ちに佐藤さんと接触し、事情を聞くと同時に、佐藤さんの協力を求めるための行動をしてもらった。私も佐藤さんと何度かお会いした。その結果、佐藤さんとしてもできれば水商売の関係者が土地の入手をしないよう希望はあったが、ほっておけば場所が場所だけに飲み屋ビルになることは十分に予想された。

当時、劉さんは既に病床にあり歩行困難であった。しかしこの問題の解決は谷市長さんにお願いする以外にない。劉さんもそのことに同意され、俺を車椅子で市長さんのところに連れて行け、ということになった。寒いときではありわたしは些か心配になったが、ここはどうしても劉さんのご出馬を願わねばことは解決に向いそうにない。明けて昭和五十九年正月早々の一月十日わたしは石崎館長とともに劉さんの車椅子を押して谷市長さんを訪問した。すでに情況は十分に把握していたので、逐一市長さんに説明し、旧居東隣りの土地を市で買い上げて頂くようお願いした。しかもことは急を要するので直ちに買い上げの手続きをお願いした。

突然に億以上の大金を要し、しかも直ちにその支出をお願いするなど、今から思うとまことに無茶な話である。市長さんもたいへん困まられたことと思う。このころ劉さんは若干の言語障害もきたし、調子のよいときと、よくないときがあった。そしてこの日は、寒くもあったし調子はよくなかった。

それでも劉さんは車椅子に坐って、訥々として買上げの必要性を強調され、市長さんも耳を傾けられた。

地方財政は既に超緊縮の時期に突入しており、市としては原則的に土地は買わないことにしているが、事情はよく分かったのでなんとか考えてみよう、というご返事を頂いたときには、張りつめた緊張が一拠にほぐれる思いをした。

わたしは帰りの車の中で、劉さんに済みませんでしたと何度もあやまりを言った。劉さんは、お前がそんなことを言う必要はない、仮りに高熱を出して寝こんでおっても俺はお願いに行っただろう、という意味のことを言われた。北九州の文化に対する熱烈な執念を劉さんの中に見たことを今でも忘れることができない。

市長さんのたいへんなご尽力で急転直下この土地の買い上げは実現した。いま鷗外旧居を訪れる人々の緑の憩い場となっており、歓楽街のまんなかに素晴しい緑地空間を持つことができた。

劉さんの夢であったあの東隣りの土地の一隅に、北九州にゆかりのある文学資料を集めた文学館を建設し、そしてこれは生前劉さんが賛成しなかったことであるが、その一隅に劉さんの文学碑を建てること、これはわたしの夢である。

愛宕遺跡

上村　佳典

はじめに

本遺跡は小倉北区菜園場一・二丁目に所在し、北九州市都市計画道路鋳物師町線改良工事に伴い、昭和五四年から昭和六十年までの七年間にわたって、Ⅰ区からⅨ区までの発掘調査を行った。Ⅰ区からⅦ区までの調査分については、すでに「愛宕遺跡Ⅰ」「愛宕遺跡Ⅱ」として二分冊の報告書を刊行した。さらに昭和六十一年度には三分冊目のⅧ区（第二地点）の報告書を刊行する予定である。本遺跡は先の報告書で記したごとく、古墳時代から幕末までの遺構・遺物が出土し、長い期間にわたって利用されていたことが伺えた。

まず立地や歴史的環境さらに特徴的な時代の概要を述べる事にする。

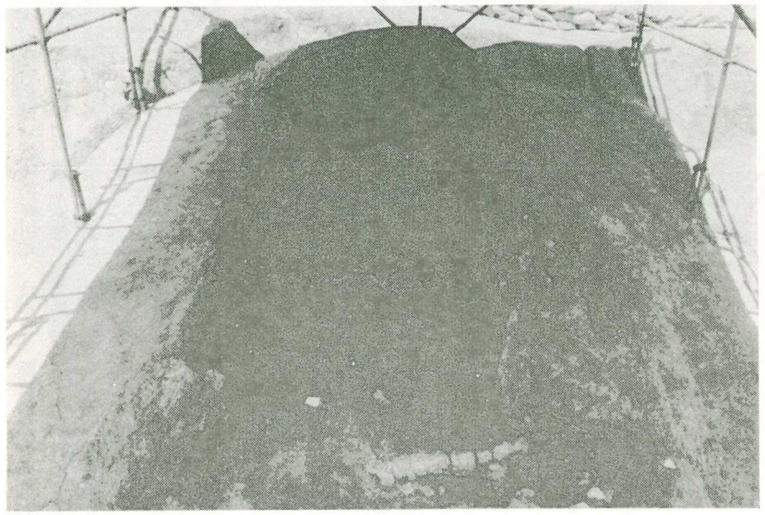
立地および歴史的環境

本遺跡は、標高約三十四ｍの愛宕山東麓、旧板櫃川左岸の河口付近、標高二～十一ｍの緩斜面に位置し、地層は古第三紀層からなる丘陵地（愛宕山）があり、麓の沖積低地は古第三系の大辻層群出山層に相当する頁岩及び礫岩を基盤とし、その上位に沖積世の砂礫層や粘質土層が堆積する。これらの標準層序はⅠ層（表土層）、Ⅱ層（明褐色粘質土層）、Ⅲ層（赤褐色粘質土層）、Ⅳ層（褐色粘質土層）、Ⅴ層（暗褐色粘質土層）、Ⅵ層（黄褐色粘質土層）、Ⅶ層（青灰色粘土質）、Ⅷ層（砂層）、Ⅸ層（砂礫層）、Ⅹ層（頁岩）であり、Ⅵ層の上位の堆積状態はほぼ安定しているが、Ⅶ層～Ⅸ層は旧板櫃川の氾濫による堆積のため複雑な堆積状態を示している。またⅡ層～Ⅲ層は江戸時代、Ⅳ層とⅤ層上位は平安から室町時代、Ⅴ層下位からⅧ層までは古墳時代の各々包含層及び生活面である。

本遺跡は小倉城外の西に近接した旧企救郡到津村に所在する。この到津の地は兵部式に記載のある到津駅が設置されたところでもある。古代におけるこれら駅の設置は陸上交通の道路の開通を意味するとともに、中央集権国家の地方行政を担ううえで重要な役割をもつものである。さらにこの到津は、西海道西路（到津―大隅）

と東路（到津―日向）の分岐点を占める重要な地でもあった。

また藤原宇合の子で光明皇后の甥にあたる藤原広嗣が僧玄昉や吉備真備により天平十一年大宰少弐に左遷された。この翌年に広嗣は上表して「時政之得失・天地之災異」を述べ僧玄昉や吉備真備を弾劾したが受け容れられず、九月大宰府を中心とする約一万の兵をもって筑紫で挙兵した。この軍を板櫃川下流域に集結させ、川を挟んで政府軍と相対したが、配下の裏切りにより破れさり夢を果たせられなかった。さらに寛弘四年には、宇佐八幡宮領の到津庄となった。この到津庄は宇佐宮大鏡に「到津庄四至、東限古駅岳、大路、南限高杯山、西限筑前遠賀堺、北限海」とある。これ以降は鎌倉・室町時代の戦国時代を経て江戸時代細川忠興の小倉入部となり、細川氏肥後移封と同時に小笠原氏が明石城から小倉城に入部し幕末に至る。



第三、第四焼成室（菜園場窯）

考古学的にこの到津周辺には弥生時代から江戸時代までの貴重な遺跡が数多くみられ、特に近年古墳時代や平安時代の重要な意味をもつ資料が増加してきている。

遺跡の概要

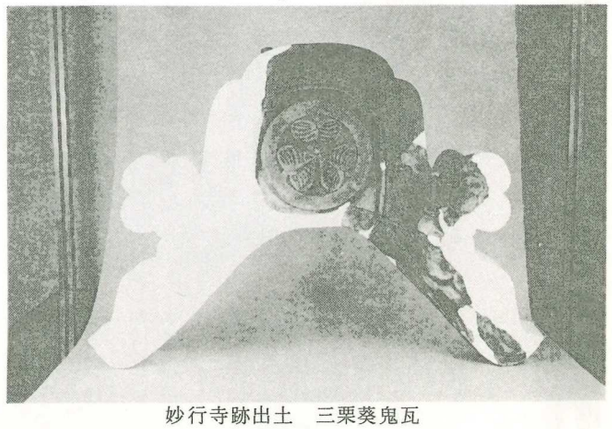
古墳時代の遺構は住居跡二軒、祭祀遺構四基、土壙・井戸などがあるが、この時代で特色となるのは、四基の祭祀遺構である。内三基は板櫃川の氾濫後の水溜りやその周辺に一度あるいは数度にわたって遺物が投げ込まれており、さらに一基は、愛宕山旧山裾に沿った状態で、遺物を立位のまま置いていた。これらの事から三基は水神様、一基は山崩れなどに対する山の神様への祭祀ではないかと考えている。

古代・中世になると、平安時代の燻焼窯一基、住居跡、掘立柱建物跡、土壙、井戸などがある。さらに遺物としては石銙鉈尾や銅製帯金具（巡方）、緑釉陶器、越州窯青磁、瓦、中世陶器などが出土した。とくに石銙鉈尾は当時の高級官吏が使用した帯の飾りの一部で、その大小により位階制度を表わしているといわれる。大きさは幅四・七㎝、長さ八・一㎝、厚さ〇・六～〇・七㎝で、五位以上の高級官吏が使用したと考えられる。五位相当職としては大宰府では少弐（三番目の位）、太政官では中弁・少弁・少納言（八番目～十番目の位）がある。さらに地方では大国の守（肥後国など）や上国の守（豊前国など）が相当する。

特に平安時代で特筆する遺構は、土器燻焼窯で、ほぼ円形をした径約四・一ｍ、深さ約一・一五ｍの擂鉢状をした土壙で、底および壁に青灰色粘土を貼り付け窯体を形成している。窯の内部には炭化した藁や部分的に焼けたり、炭化した竹・木片が堆積し、それらに挟まれた状態で椀・杯・小皿が出土した。

江戸時代になると千利休門下であった細川忠興が開窯させた上野焼創始期の窯であり、御庭焼としての性格をもつ菜園場窯跡と小笠原忠真が足立山の麓に創建し、その後延宝七年に愛宕山に移転した妙行寺跡がある。

菜園場窯は十六世紀の終り豊臣秀吉が朝鮮半島へ出兵した際加藤清正が釜山より陶工を連れ帰った。その内の一人が尊楷といわれ一時唐津に住んでいたが忠興小倉入部の際召され、菜園場で開窯したと伝えられる。さらに上野でも開窯したため、その地名を取り、日本名を上野喜蔵高国とした。その後



妙行寺跡出土　三栗葵鬼瓦

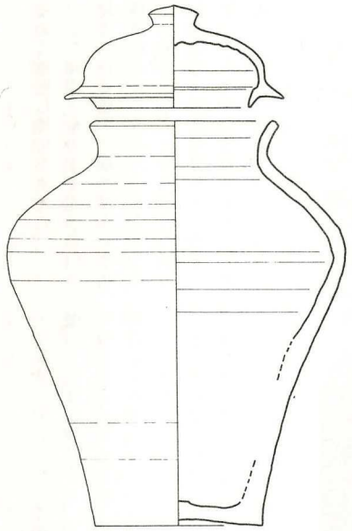
細川氏の移封に伴い肥後の高田郷八代へと移り、豊前では上野焼、肥後では高田焼として現在に続いている。

この上野焼は茶人小堀遠州が推選した〈遠州七窯〉の一つにあげられている。現在の上野焼の釉薬は銅系釉（緑青流し、総青）、鉄系釉（黒、飴、紫蘚色）、黄釉（金肌の一種）、三彩釉（銅鉄混用）、透明釉（長石）、素面釉、藁白釉などが使われており、高田焼では象嵌の技法（雲鶴手、三島手など）を伝えている。

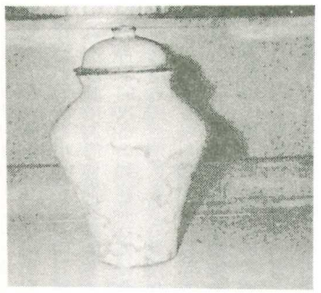
菜園場窯の構造は、焚口と焼成室四室で窯尻に「コ」の字形の排水溝をもつ地上式割竹型登窯である。平面形は焚口と焼成室との長軸のズレは若干あるが主軸をほぼ一直線にとる据すぼまりの長方形状をし、窯尻の地山整形面を含めた全長は約十六・六ｍである。また焼成室天井部の残存部と焚口床面の最下位との比高差は約四・五ｍである。また窯尻床面から焚口床面までの高低差は約三・三ｍである。

出土遺物は茶椀、茶入、向付、水盤、灰器、水指の蓋などがある。胎土は朝鮮からの持込みと考えられる良質の白土（現在の上野焼で一等土の太白に類似）、粒子が荒く鉄分の多い土、きめ細かくよく水漉された土など数種類が使用され、釉薬には藁灰、鉄釉などが使われ、鉄絵、刷毛目などもみられる。技法的にはロクロ成形で削り出し高台や糸切り離しがあり、型打ちや叩き手法もある。

開窯時期や性格については「愛宕遺跡Ⅰ」で述べたごとく一六〇三年～一六一九年の開窯時期および操業期間が考えられ、忠興の御庭焼の性格をもつ窯のため、遺物が単一の特徴だけではなく、陶器、白磁、染付等種々の胎土や釉薬をもち器種についても種々ある。これらの事から忠興が菜園場窯で種々の茶陶を焼かせたことがうかがえる。これがこの菜園場窯の最大の特徴である。



藁灰釉蓋付壷（愛宕遺跡Ⅷ区出土）



愛宕遺跡Ⅷ区出土
藁灰釉蓋付壷
（菜園場窯初期の作品）

おわりに

愛宕遺跡の概要を述べたが、古墳時代から江戸時代にかけてのそれぞれの時代には、重要な内容、問題を多分に含んでおり、各時代の項では説明がすべて寸足らずで終始した。「愛宕遺跡Ⅰ」「愛宕遺跡Ⅱ」をすでに刊行し、順次「Ⅲ」「Ⅳ」の報告書を刊行する予定であるので、具体的な内容については今後の報告書を参考にしていただきたい。

最後になりましたが、菜園場窯と平安時代の燻焼窯は現地に移設保存しています。興味のある方は見学されたい。

「北九州四百年展」を終って

今村　保

わがふるさと…江戸時代から現代まで「北九州四百年展」は、去る五月二十九日から六月三日まで、小倉井筒屋七階催場において開催された。

当会主催（北九州市・北九州市教育委員会後援）の今回の展覧会は、本年度行事として総会にも図り、会員の協力方をお願いしたが、お蔭をもって盛況裡に終り、所期の目的を達成することができた。

しかし、この四百年展を成功させるための関係者の努力と苦労は並々ならぬものがあった。

三月二十二日に第一回実行委員会をもってより、開会に至るまで、わずか二カ月余りの期間であったが、この間―出品リストアップ、出品依頼、承諾、現品預り、運搬―と、担当委員は文字通り東奔西走した。

「北九州市の文化財を守る会」からと云っても、ピンとこない出品者がいても当然だが、これも直接交渉に当った委員個人を信頼し、また、その熱意があってこそ、およそ六百点にも及ぶ出品をみたのである。

それにしても、開会前日の会場設備ほど、めまぐるしいことはなかった。

井筒屋二川課長が直接指揮をとったが、コーナー別に出品搬入、レイアウト飾りつけと、まるで戦場のようだった。夜、遅くなって適当に退散したが、明朝でてきてみてびっくりした。

きれいに片付けられた会場は、眼を見張るばかり見事に完成していた。日通美術とかいうひとがあとに残っていたが、やはりプロの仕事である。二川課長に聞くと、それでも夜中の二時までかかったという。裏方の苦労がわかった。

開会式は予定通り、五月二十九日（木）午前九時五十分より催場

前で行われた。外はあいにくの雨であったが、にもかかわらず五十人近くの招待者が出席された。

主催者として小林会長があいさつし、北九州市を代表して、小野教育長から祝辞をいただいたあと、井筒屋吉永専務とともに、三人でテープルカットを行なった。前後して、報道関係とともに、初日から続々と入場者がつめかけてきて心強い限りではあった。

会期中、入場者からもいろいろと質問もあったが、

「私の家にも代々伝わる古い文書や什器があるので、出して貰えないだろうか」と申し出る者もいたり、同じような電話がかかってきた。まだまだ掘り起す文化財が市内にはあるようだ。

会場入口では、井筒屋の女性が『出品目録』を入場者に手渡したが、当会からも、この機会にと印刷した『守る会々則』と『入会のすすめ』を置いて、適当に配付した。

その結果、その場ですぐ入会した者、後日申込書を送付してきた者とで、二十名近くの新会員を勧誘することができた。

また、会場出口売場で同展に関連した本、のれん、絵はがきなどを依託販売して貰ったが、予期以上の売上げがあった。

コーナーを一つ一つ丁寧に見て歩く者もいれば「今日は暇がないからまた来ます」と、名残惜しげに去って行く者もいたが、ともかく六日間の会期はあわただしく幕を閉じた。

会場の閉鎖とともに、ただちに作品の撤去、搬出がはじまったが「あれだけ苦労して集めたものを、もう取り払うのか」といった一抹の淋しさと、安堵があった。「もう一週間ぐらいは欲しかった」とは、後日、反省会でもでた言葉ではあったが……。

しかし、短期間ではあったが、連日多数の市民がつめかけ、延一万八千人もの入場者があったことは、大きな成果であり「四百年展」が市民の文化財に対する認識を深め、郷土の将来の歴史に資することは間違いないであろう。

テープカット

〔付記〕

「会報」を繰ってみると、過去このような展覧会が開かれたのは、昭和四十八年二月九日から二月十四日まで、北九州市制十周年記念「文化財が語る北九州の歴史展」があり、場所も同じ小倉井筒屋七階催場であったが、これは北九州市・北九州教育委員会が主催している。

常盤橋擬宝珠